

振り返れば、当たり前のように北アルプスの峰々が見える。この日本一の景観こそが、安曇野の最大の財産であることは、言うまでもない。

信州での 新・田舎スタイル



宮崎崇徳さん

38歳。埼玉県浦和市出身。南安曇郡穂高町在住。みつ枝夫人は、地元小学校の教員。一女の父。大学卒業後、東京で不動産会社に就職するが、6年後に希望退職。住宅メーカーの不動産部門に再就職し、穂高町へ。しかし、2年前に独立し、現在は自宅を事務所し、インターネットを武器にIターン希望者に地元不動産物件を仲介する「ライフポート安曇野」主宰。

中澤滋さん

53歳。東京都出身。南安曇郡神川村在住。看護師をしている奥さんの恵子さんと2人暮らし。自宅は、テクニカルライター、製品安全コンサルタントなどの仕事を行う「ASP研究所」の事務所を兼ねる。電気機器メーカーでのサラリーマン時代は、アラビア、カナダなどの海外駐在歴も。子ども時代から自然や植物好きで、成人してからは山登りや野鳥観察に熱中。サラリーマン時代には、市民農園を借りて農作業体験もしている。平成2年に現在の地へ。

新・信州人倶楽部メンバーが贈る、安曇野讃歌 最高の景観と適度な都会感覚に魅せられて

新天地に人が住み始めれば、いつしか横のつながりが生まれる。

全国各地に住み着いた新田舎人も同様だ。安曇野に新天地を求めたIターン同士の横の交流をと、7年前に発足した新・信州人倶楽部もその一つ。

当初は二十家族ほどだったが現在は六十家族に増え、親睦会、新規移住希望者のための情報提供、ボランティア活動など、活発な活動を展開している。

そんなメンバー五人に、安曇野の魅力について語っていただいた。



島田宗彦さん

69歳。東京都出身。南安曇郡穂高町在住。房子夫人（66歳）と2人暮らし。1男2女あり。現在「編集工房安曇野」主宰。長年経理畑を歩むが、50歳ごろから、脱会社人間を意識し北アルプス周辺で土地探しを始める。現在の地も山仲間紹介で、平成6年に移住。山登りや山岳写真撮影などに明け暮れる日々だが、ときには夫婦でリンゴの採り入れ、地元の旅館の経理、奥さんは旅館の仲居さんなどのパートも体験する。60歳過ぎでも、選ばない限りは田舎では仕事はいくらでもある、と語る。

高松伸幸さん

35歳。和歌山県葛城郡出身。南安曇郡穂高町在住。ログハウスの設計管理を行う、高松建築工房主宰。2級建築士。独身。奈良の大学を卒業後、東京の証券会社に入社。後に大阪のログハウス販売施工会社に転職し、東日本エリアを担当。栃木、那須、成田、信州を回る。平成10年に穂高町へ。「将来は、軸組工法の家にも挑戦したいですね。だんだん古民家の重さを実感しつつあります」。

亀井智泉（ちせん）さん

37歳。大阪府池田市出身。南安曇郡金村町在住。ご主人宏行さん（39歳）は塩尻にある電子機器メーカーの技術者。結婚12年。平成11年、4年間脳死状態で生きた長女陽菜ちゃんを失うが、現在も、瑠菜、亜菜、球菜の3女のお母さん。信州での最初の暮らしはご主人の会社のある塩尻市だったが、子育てのため8年前に現在の地へ引っ越す。従って、ご主人は毎日30分の高速通勤。毎朝4時に起き、ご主人のお弁当づくり、子どもたちの送り迎えなどに大忙しの日々である。

信州で暮らしませんか?

30人参加のサークル誌

「新・信州人倶楽部」が、その事業の一環として募集した「信州ターン大賞体験作文」の応募作品をまとめたもの。自費出版のため、長野県の一部の書店または、郵便局備え付け振込用紙で購入、1750円（送料込み）。詳しくは27ページの「新・信州人倶楽部事務局までお問い合わせを。」

遠い信州 近い信州

亀井 主人は京都、私は大阪出身なんです。関西から見ると信州は遠いんです。雪が多い、寒い。そこから先は、まったくイメージが広がらない(笑)。

高松 僕は和歌山出身なんです。信州に来るにはまず大阪に出る。そして名古屋あたりから、やっと東京の人間たちとヨーイドンという感じですね(笑)。

中澤 東京からだ、山一つ越えろと信州というイメージなんだけどね。

宮崎 でも逆に、山やスキーといえば、信州というイメージが関西人には固定しているのでは？僕は埼玉ですが、関東人にとっては信州は、いろいろあるエリアの一つなんです。関東をちよつと広くした感じで、はるか彼方の遠い田舎という感覚もありませんね。

中沢 確かにつながっているよね。新宿、八王子、山梨、信州と、緑が途切れない。

亀井 主人は高校の修学旅行で五月の上高地に来て風景に圧倒され、それで信州にのめり込んでしまったんです。でも、主人の実家も京都の嵐山の近くで、日本有数の景観の地なんですよ(笑)。



亀井 緑の色が違うんですよ。とにかく、柔らかい。



穂高町在住の島田さんご夫妻。「旅館で女中さんの真似事をして働いていると言ったら、娘が『お母さん、何考えてるの』って(笑)。でも、お友達もできて楽しかったですよ」と、房子さん。



高松 目の前の当たり前の景色が、日本最高の風景なんですからぜひいたくなものですよ。



島田 確かに、最初に上高地を見るとびっくりするだろうな。まったくの別世界だもの。

亀井 緑の色が違うんですよ。とにかく、柔らかい。それに比べると、大阪なんて亜熱帯(笑)。信州では、木々の間を風が吹き抜けていく。

島田 確かに、風が吹き渡るという感じだよ。

それぞれの 移住の理由

中澤 どうしてそんな信州に住む場所として選んだか、ということになるんですが、僕の場合は東京は人間が住むには適さない環境ではないかという思いがあって、最初は首都圏からの日帰り圏内、福島、山梨、長野を探していました。都会に近い場所、という安全パイを求めていたんでしょう。ところがパブル全盛期になると、田舎物件も売り手市場となり、信頼できる商品なんかないわけです。そこで、県の開発公社に問い合わせたり、「信濃毎日」を二日遅れで購読したりして、梓川村の開発公社が分譲した土地に出会いました。そこで応募したら抽選に当たってしまいましたね。これも、何かの縁だろうと。

島田 東京で地方紙を購読するな

んで、気合が入っている(笑)。
中澤 都会的な場所にアクセスが容易な場所、というのが条件だったんです。ですから、新宿にだって車で二時間半で出られます。田舎に住んでいても、たまにはおしやれやおいしいものに接したい。そんなライフスタイルが二割くらいは残っていてもいいのではないかと、という考えですね。

宮崎 僕は山登りが好きで、大学時代の四年間は毎年夏になると安曇野のユースホステルに居候していました。就職は東京でしたが、バブルで会社が崩壊して希望退職を募ったとき、東京で再就職するよりも、こちらで仕事があるなら思い切つて来よう、と。ですから、会社が潰れていなかったら今ここに住んでいたかどうか。

高松 僕の場合は、子ども時代から信州好きの親父が、よく車で連れてきてくれていたんです。それが影響して、高校時代に登山部に所属し、夏や冬ともなると白馬にやってくる。大学を出てからは東京で就職したんですが、都会生活にウンザリして、今度は関西のログハウスの販売施工の会社に就職。当然ながら、田舎との接点ができるだろうという計算からです。そうして信州方面を担当するケースが多くなり、地元にも知



亀井さんの住まいは、敷地60坪。庭には、ご主人手作りのベンチや砂場、畑などが。ご主人は鉄道マニアでもあるが、大工仕事にも凝る。



宮崎さん宅のテラス。ここに座ると、正面に常念岳が。大学時代から眺め続けた風景だが、今も飽きることはない。

中澤 これも、何かの縁だろうと。



り合いが増え、どうせ独立するなら信州、というわけで、穂高町に建築事務所を開設したわけです。
亀井 私の場合は完全に主人主導型です。大学を出た後、私は学校で職員をしていたんですが、大学院で学んでいた主人が、信州の会社に就職したいから一緒に行かないかというわけです。よく考えてたら、これ、プロポーズだったんですね(笑)。ところが、準備のために初めて信州へやって来たたら、中央線は行けども行けども山の中(笑)。こんな山奥に人が住んでいるのか、と(笑)。
島田 私の場合は、昭和三十年から山登りをやってきましたね。リタイア後はのんびり過ごすことを目的としました。そこで、好きな山の写真を人生の仕上げにしたかった。そのためには、北アルプスにすぐ入れる場所が条件でした。さらには、日常生活の利便性でしょうね。田舎であっても、そこそこ都会的機能が得られる場所であってほしい。海外駐在歴が長い友人が遊びに来てこう言いましたよ。「この生活は、ニューヨーク郊外と大して変わらないよ。こんな場所は、日本でも少ないんじゃないか」。つまり、各種スーパーもある、自然は豊か、さらに松本という都会も近い、という意味なん

でしようね。

適度に田舎 適度に都会

宮崎 でも、地元の人たちはそんな素晴らしい場所に自分たちが住んでいるという認識がない。第一、山に登らない。これは意外だった(笑)。

島田 山から帰ってくると、近所の人「何、採ってきた？」と聞くんだよね。山に行くということは、山菜採りしか意味しないらしい(笑)。

中澤 僕自身は、松本市郊外に住んでいるという感じなんです。何しろ、中心部まで車で十五分なんです。ところが、松本市内に住んでいる人から見れば、どうやら梓川村は山奥らしいんですね(笑)。僕にすれば、杉並と新宿の関係、といった感じなんだけど。

島田 仕事で松本によく出るけど、「穂高から来た」と言うのとビックリするね。車でたった三十分なんだけども(笑)。

亀井 確かに私も、都会的感覚を残したい、という思いはあります。たとえば、農家のおばちゃんが育てたトマトをもらっても、料理するときのスパイスは都会のものを使いたい。だから、「粕もあるよ」と言われても、「カスはいらぬ」



島田 それにしても、ここの景観のすごさは、圧倒的だね。

家の前を流れる梓川の畔が、中澤さんのフィールド。都会時代から日本野鳥の会に入り、移住してからは地元の自然愛好家と共に、自宅から車で数分の場所に、ミニサンクチュアリをつくりあげた。



大町市に建設中のログハウスの進行具合をチェックする高松さん。ときには施工さんと一緒に、工を手伝い、汗を流すこともある。



宮崎 「都会の何がほしいか？ 何を捨てたか？」
なんて言われても思いつかないですね。

穂高町の郊外のお店で開かれた新・信州人倶楽部の座談会。地元の人たちの運転マナーなどについてのユニークな考察もあったが、装面の関係で採録できなかったのが残念。



と(笑)。だからといって、おしゃべりは必要じゃなくなるし、プランドも知らなくても「自分たちは、いい暮らしをしている」という感じになりますね。

宮崎 僕は今、自宅を事務所にして仕事をしているので、幼稚園の子どもの出迎えにも行くんですよ。それも天気の良い日なんか、早朝から山に登り、ビールを飲んで一休みし、「そろそろ、娘を迎えに降りるか」といった感じで帰ってくる

(笑)。それで充分間に合うんです。
島田 それに、冬は雪が少ないことが案外知られてないみたいだね。
宮崎 穂高は内陸性気候で、二〇は離れた大町市は日本海性気候。だから、穂高の冬は明るく雪も少ない。たまに降っても、二〇センチくらいですね。

島田 それも年に一回くらいね。我われ年寄りには、その程度の雪でも大変だけど(笑)。

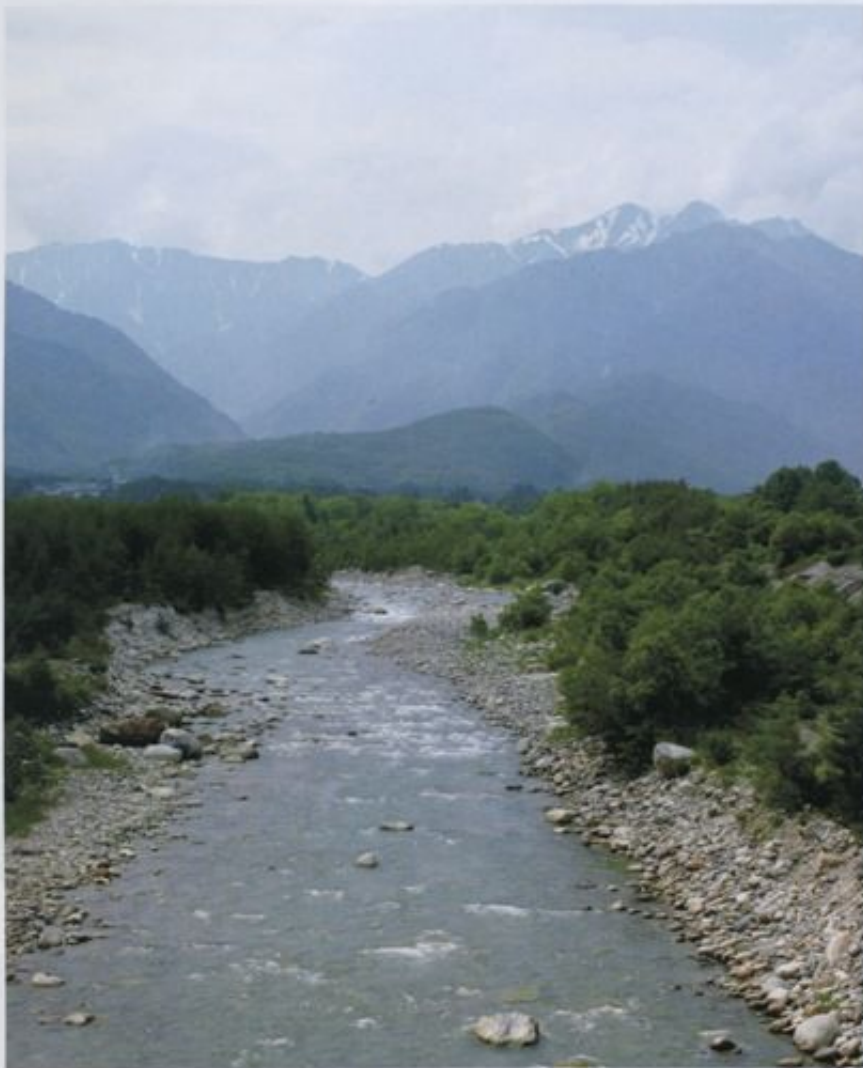
中澤 最低気温もせいぜいマイナス一三度くらいじゃないですか？

宮崎 夏は湿度が低くて快適だし。亀井 大阪に帰ると、脳味噌が溶ける(笑)。

宮崎 ですから、ここはすごい田舎でもなく、すごい観光地でもなく、ましてや都会でもなく、適度にバランスのとれた地域なんですよ。だから僕には、「都会の何がほしいか？ 何を捨てたか？」なんて言われても思いつかないですね。

中澤 最近では、新鮮な魚の一品ものを扱う店も出てきたしね。

亀井 ただ、その魚をさばく出刃包丁は、残念ながら売ってない(笑)。せいぜい、そんな程度ですよ。足りないものといっても。ただ、とんとんいい景観がなくなるのがもったいないですね。もうこれ以上は、発展志向は止めてほしい。



梓川、そして信濃川に通じる高瀬川の景観。大町市付近で。秋の紅葉の季節は、息を飲むほどの美しさとか。



島田 それにしても、この景観のすこさは、圧倒的だね。誰にも文句は言わせない(笑)。それに、空気と水がうまい。

中澤 自分の家の前の電線にカッコイイが止まったりしてますからね。高松 目の前の当たり前の景色が、日本最高の風景なんです。それこそ、車を運転していても景色に見とれて、自分がどこを走っているのかわからなくなるときがあるくらいですから。

中澤 結局、この最大の魅力は、自然環境のよさに尽きるといふことなんですよ。

文・湯川豊彦 写真・笠原修一

■ 問い合わせ先 ■

新・信州人倶楽部事務局

長野県南安曇郡梓川村梓3072-12 (中澤)

☎/ 0263-78-5002

e-mail: asp@agate.plala.or.jp

http://www.azumino.cnet.ne.jp/countrylife/club/